

---

---

瀟瀟八景の受容の観点からみる伝狩野元信「四季花木草花図下絵山水図押絵貼屏風」

---

---

本発表は、瀟瀟八景の受容の観点からフリーア美術館所蔵伝狩野元信〈四季花木草花図下絵山水図押絵貼屏風〉（以下、本図）について考察を行い、瀟瀟八景を屏風形式で受容する初期的様相について検討を試みるものである。

本屏風は大和絵金屏風の下絵に12枚の水墨山水図を組み合わせるという点で、狩野元信の世代からの狩野派が創出した和漢融合の好例と見られている。本発表では12枚の水墨画の画面の内容と構図を詳しく分析した上で、まず下記の三点を指摘する。

まず、第一点は、この12枚の水墨画には瀟瀟八景の内の「平沙落雁」と「瀟瀟夜雨」以外の六景のモチーフが確認できること。第二点は、本屏風は各隻の6枚の水墨画がそれぞれ右から左へ四季が展開するが、一方で、着色の下絵は二隻連続的に四季が右から左へ展開しており、四季の配列という点で矛盾している。そして、第三点は、12枚の水墨山水図を組み合わせて見ると、相互に連続する画面を指摘することができる点である。具体的には、右隻の右2と3の間には一部分が少し欠けているが、右1-4は連続的な構図と考えることができる。さらに、左隻3扇目の山水図は、少し上に移動することにより、左4扇目の山水図と完璧に繋がる。つまり、これら12図は本来連続していた画面から分断されたものである可能性が指摘できるのである。

上記第三点からは、この12枚の縦幅の水墨山水図が、画卷形式の瀟瀟八景図から切り取られたものであるという推論が可能となる。しかし、各山水図の縦幅81.2センチメートルの寸法から考えると、それぞれの山水図は画卷形式の瀟瀟八景図から直接的に切り離されたのではなく、画卷形式の部分を実に拡大模写したという可能性を提起したい。

牧谿、玉潤、夏珪の「瀟瀟八景図」長巻は足利将軍家の所蔵にあった、『室町殿行幸御傍記』によると、1437年に後花園天皇が室町殿へ行幸した際、すでに切断され、掛軸に改装されたことがわかっており、それらが狩野派をはじめとする絵師たちに大きな影響を与えたことはすでに指摘されている。また、正木美術館所蔵雪村筆瀟瀟八景図巻は、玉潤様の瀟瀟八景図巻を模写したものであることがわかっている。このような状況を考えると、日本における瀟瀟八景図の受容と変容のあり方にひとつに、中国から伝来した画卷形式を大画面化するという手法があったことは明らかである。このような受容の状況に本図の12枚の水墨山水図を考え合わせると、画卷形式の瀟瀟八景図を分断して、押絵貼形式で大画面化した状況を指摘することができる。

本発表では、上述の展開から、本図が日本における瀟瀟八景図受容史において、押絵貼形式での瀟瀟八景図という初期的な様相を示す重要な作品であることを指摘したい。